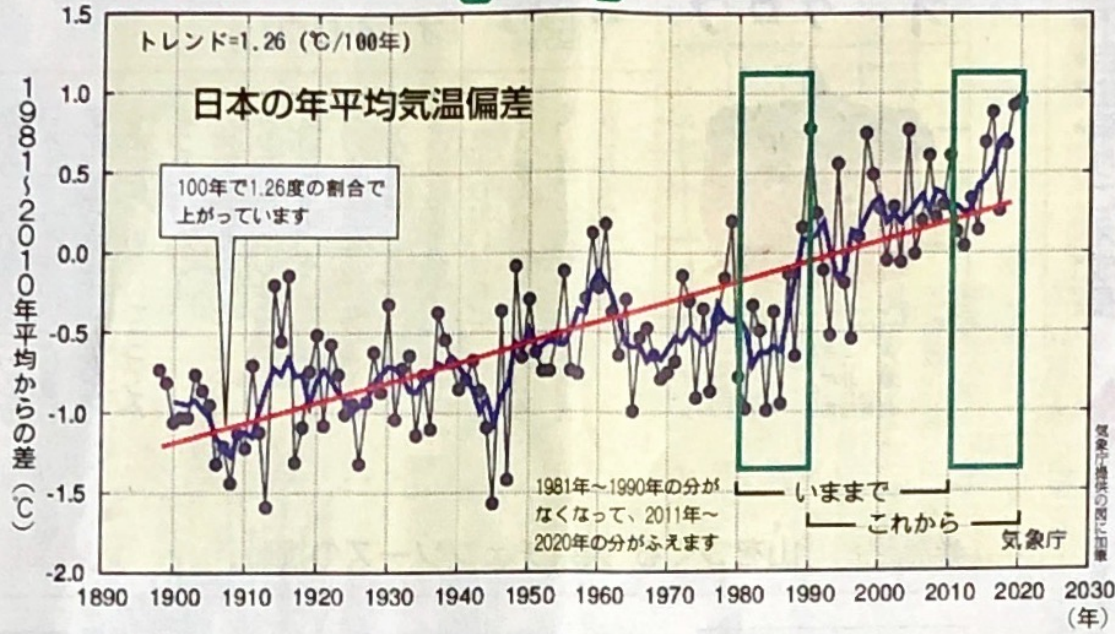


気候の平年 10年ぶりにかわるよ



「今年は平年と比べ暖冬だった」というときの「平年」の値が10年ぶりにかわります。気象庁が5月から切りかえると発表しました。いまは1981年~2010年の数値をもとにしていますが、1991年~2020年の数値にかわります。(山本朝子)

直近の30年分の平均が平年値

天気予報で「今年はいつものに比べ、サクラの開花が早まりそうです」などと耳にしたことがあるでしょう。この「いつも」のもとになっているのが平年値です。

平年値は気象庁がつくり出す。気象庁は気温や降水量、日照時間、積雪の深さ、さらにサク

ラのさく時期や梅雨入り、台風が発生数なども調べています。それらの値を直近の30年分、平均したものが平年値で、10年ごとに見直しています。30年という期間は国際連合の世界気象機関(WMO)の基準にもとづいています。

5月19日から新しくなる平年値をいまの平年値と比べると、日本の年間の平均気温は0.3度高くなりました。

気象庁の大気海洋部観測整備計画課の村井博一さんは「全国で0.3度上昇しているのは、10年前の見直しのときもそうでした。グラフの赤い直線は100年を平均した上昇の傾きを示していますが、1980年代後半以降に目を向けると、折れ線グラフの多くの点が赤い線より上にあります。つまり「気温が急速に上昇しています。背景には地球温暖化の影響も考えられます」と話します。

平年値どうかわる?

平均気温	全国的に0.1~0.5度高くなる
真夏日(1日の最高気温が30度以上の日)	多くの地点で年間3日以上ふえる
猛暑日(1日の最高気温が35度以上の日)	年間で4日以上ふえるところも
冬日(1日の最低気温が0度未満の日)	多くの地点で年間2日以上へる
降水量	季節によって多くの地点で10%程度多くなる
降雪量	多くの地点でへり、30%以上へるところも
サクラの開花日	ほとんどの地点で1~2日早くなる

平均気温は年間+0.3度/雪より雨多く

平年並みだからと安心しないで

最高気温が30度以上の「真夏日」や、35度以上の「猛暑日」の日数もふえ、最低気温が0度未満の「冬日」はへる傾向です。降水量は夏の西日本や秋と冬の太平洋側の多くで10%程度ふえます。一方、降雪量は少なくなる地点が多く、30%へるところも。気温が上がリ雨として降りやすくなったそうです。

平年値は気温や雨の量などを知る目安になるものです。ただし、村井さんは「平年並みだからといって安心できるわけではない」といいます。

例えば2018年に国内で最も高い気温41.1度を記録した埼玉県熊谷市。写真の猛暑日の日数で考えてみましょう。いままでの平年値は年間13.9日でしたが、これからは18.1日になります。もし今年の猛暑日が18日になったとしたら、去年までなら「平年と比べて多かった」といわれましたが、今年からは「平年並み」です。実際の気温を見て、熱中症の危険などを判断する必要があります。



百貨店前の「大温度計」に、国内最高の41.1度が掲示されました。2018年7月23日、埼玉県熊谷市